

六月一七日(木)朝八時頃、ホテルのロビーに出て、秦始皇陵の方をまわるツアーのチケットを買った。ツアーは九時発で兵馬俑(へいばよう)見学をメインにしていくつかの見所をまわるもので、二二元(外国人はFEC)。同室のイギリス人カップルが行くというので、便乗したのだ。

ロビーに出たついでに今夜の分の宿代を払おうとして、ちよつとしたトラブル。支払いを調べた服务员は、昨夜の分ももらっていない、と言うのだ。服务员が見せた伝票は六月一五日の日付になっていて、それを見た僕は焦る。一五日の夜といえば、西安に到着した夜。駅前広場に眠った夜だ。ホテルにチェックインしたのは一六日の早朝。たぶん早朝勤務の服务员が日付を間違えたのだろうが、それをどのように中国語で伝え、そのことをどのように証明したらいいのだろう。しばらく問答したのだけれども、伝票の日付をたてにして服务员は納得しようとはしない。これは困ったことになったと思っただけけれども、ふと僕は思いつく。あわてて部屋に戻り、列車のチケットを取ってきた。チケットの日付を示し、一五日の夜は列車の中で眠り、ここに着いたのは一六日の朝だ、ということをなんとかつたない中国語で伝えた。結局、チケットの日付が効いて、なんとか分かってもらえたのだった。

ツアーのミニバスは九時過ぎに勝利飯店を出発。観光客三〇人ほどのほとんどは中国人で、外国人といえばイギリス人のカップル、二人の白人女性、それに僕だけ。運転手兼添乗員の男は乗客をぐるりと眺めまわして、ふと僕に目を止める。

「おまえはどこから来た？」

「日本……」

たぶん外国人のようだけれども、もちろん白人ではなく、かといって日本人にも見えなかったのだろう。運転手は冗談口調で何事か言葉を放った。

「……ウルムチ！」

同乗の中国人観光客たちも運転手の冗談口調に応じるように、僕の方を見て笑い声をあげた。運転手の中国語を僕はほとんど聞き取れなかったけれども、その意味は直観的に分かった。つまり、

「日本人のようには見えない。ウルムチの人のようだ」

と言ったのだろう。もともと少し彫りの深い顔をしているうえに僕はとても日焼けしていたので、運転手の言葉には納得したのだけれども、その冗談口調の内にある感情が僕にはうかがいしれなかったので、僕はただあいまいな表情で応えただけだ。

バスは西安西郊外の田舎道を小一時間ほど走り、まだできたばかりという感じの真新しい博物館風の建物の前に停車した。始皇陵と兵馬俑以外はどこをまわるのか知らなかったのとまどつたのだけれども、中国人たちのあとをつけて入館した。料金は一〇元。もちろん中国人の顔をして、人民幣で支払ったのと言うまでもない。ちなみに外国人は三〇元（FEC）。

入館して、ふとうしろが騒がしいので振り返ると、二人の白人女性が服務員となにやら言い合っていた。学生証らしきものを提示し、何事か声をあげているのを見ると、どうやら入館料のことでもめているようだ。（外国人でも留学生や学生に対しては割引があることがあるらしい。）ふと同室のイギリス人カップルのことが頭を過ぎったけれども、自分が中国人になりすまして入館した身であることを思い、とぼつちりがこちらにも及ぶことを恐れて、そそくさと入口でのいさかいをあとにしたのだった。そのときかすかに良心のうずきを感じたのは、それは中国人服務員をだまして中国人科金で入館していることに対してなのか、あるいは若い白人女性のように二重価格の不当性を堂々と主張することを迂回して、こそくに問題を回避しているということに対してなのかは分からない。

さて、そのようにかすかな後ろめたさのようなものを感じながら見物したモノはというと、館の名前、西安臨潼蠟像館『西安事変庁』があらわすとおりの西安事件を題材にした蠟人形なのだった。西安事件というのは一九三六年一二月、すでに満州をその手中にし、さらに華北へと侵略の手を伸ばしつつあった日本に対して、抗日よりもむしろ共産党との内戦を優先させようとする蒋介石を、張学良、楊虎城両将軍が監禁し、一致して抗日にあたるようにと強制した事件で、その後の第二次国共合作の引き金となった。蠟人形は十五の場面で構成され、毛沢東、周恩来ら有名な人物も登場するそれらしいモノだったけれども、それだけという感じもした。この臨潼という場所が西安事件においてどのような意味をもつ場所なのか、僕には分からないけれども、真新しい館の様子といい、蠟人形といういかにも観光客受けするような安易な発想といい、むしろ観光コースの一環として計画されたもののように思われた。

中国人観光客とともに館内をひとまわりして駐車場に戻ってくると、イギリス人カップルはビールを飲みながらバスの脇で休憩していた。高いから止めにした、と言う。それを聞いて、僕は西洋人は一目で外国人だと分かってしまうから損だな、という思いとともに、同じ外国人なのに自分だけがうまく立ち回っているような後ろめたさを感じたのだった。

『西安事変序』をあとにしたバスはさらに郊外へとしばらく走り、田園地帯の中に盛り上がる小高い丘という印象の場所に着いた。秦始皇陵だった。駐車場からしばらく歩くと、丘の頂上まで続く石段があり、登り口には『秦始皇帝陵』の碑が立っている。観光客はそんなに多くはない。参道にはお土産物の屋台が軒を並べているが、心持ち手持ちぶさたの様子だ。この地の特産というわけで兵馬俑をモデルにした像が目につく。もちろんここにも外国人料金という淀は貫徹しているのだけれども、ツアーのメインテーマということもあって、イギリス人のカップルも入場し、僕はゆっくりと秦始皇陵の石段を登っていった。

始皇帝の墳丘はピラミッド形の築山だということだが、長年の侵食によつて、また果樹などが生い茂っているために、墓というよりは丘という感じだ。現在では高さは約五三メートル。その南には驪山がそびえ、北の方向には広々とした郊外の田園地帯が広がっている。

墳丘の頂上にはなにもなく、十人程度の観光客と二、三のお土産物売りの姿だけ。丘の頂上を流れる気持ちの良い風に吹かれながら僕は煙草を吸った。

まるで一場の夢のようにかき消えた秦帝国、夢のようにかき消えた始皇帝陵の宮殿。壮大な設計の瓦解したあとには、ただ二二〇〇年ののどかだが、こののどかの地下深くにはいったい何が埋まっているのか、僕は知らない。春まだ浅い一九七四年三月末、村の農夫たちが井戸掘りをしていて、偶然に掘り当てたのは、まるで神話のような始皇帝その人の伝説。そのとき伝説は確実な手ざわりをもった事実として、のどかのただ中に露出する。

司馬遷の『史記』には始皇帝陵について次のように記されている。

始皇帝三十七年（前二一〇）九月、始皇帝を驪山に葬った。始皇帝は即位するとすぐ驪山に陵を営みはじめた。天下を統一すると、天下の罪人七十万人を都に徴収して造営にあたらせた。三泉を穿ち、銅を下して槨を作った。墓内は宮觀に象り、百官が位につく様を表現した。器皿の絶品や珍しい獣を宮中から移して、ことごとく墓中に満たした。工匠に命じて機械仕掛けの弩を作らせ、盗掘人が侵入してきたら、矢を射かけるように工夫した。水銀で天下の河川と大海を表現し、機械を使って水銀をめぐらせた。墓室の上には天文、下には地理を象る装飾を施した。人魚の油で明かりをともしたのは、永久に消えないようにとの願いからである。…（中略）…始皇帝の棺を納めたのち、ある人が次のようにいった。「工匠たちは防犯の装置を作り、また墓内に納められた珍品をことごとく承知している。宝の価値ははかり知れず、もし秘密が漏れたなら、一卷の終わりとなるう」。棺が納められ、内側の戸を閉ざしたあと、外側の戸を閉めて埋葬に携わっ

た工匠たちを二度と出てこれないように封じ込めてしまった。地上には草木を植えて山に擬した。(NHK出版「始皇帝」より)。

これは一場の夢なのだろうか。始皇帝が成し遂げた最初の統一国家、秦。わずか一五年しか続かなかった秦の統治は、数千年に及ぶ中国の歴史においてはまばたきほどの瞬間にしかすぎない。しかしまた瞬間であるからこそ、その断層は強烈な記憶として、あるいは伝説として残り続ける。やがて時とともに伝説は事実としての手ざわりを失い、歴史の彼方に失われる。僕が今立っているのは現在という地表。その地下にいったい何が眠り、今その記憶の深みから露出しようとしている事実がいったい何なのか、僕らは知らない。地下宮殿の存在はなぞのまま。出土品の発掘方法が確立されていない現在、始皇帝陵そのものを発掘することは予定されてはいない。長いあいだ疑問視されてきた司馬遷の記述や、幾度かの盗掘や炎上が伝説として言い伝えられているだけだ。ただ、最近の調査で墳丘から採取された土中の水銀濃度が平均よりも極めて高いという結果が報告されている。曖昧な伝説の霧を突き破って、そこから露出する「水銀の海と川」という事実。始皇帝、秦というリアルが伝説のただ中から立ち上がる。

秦始皇帝陵から兵馬俑坑まではミニバスで十分ほど、二キロほどの距離だ。のどかな田園風景のただ中に突然現れた今世紀最大の考古学的発見の現場にふさわしく、広い駐車場には観光バスが並び、早くも大観光地という匂いを放っていた。秦俑博物館へと向かう道沿いにはお土産物屋さんや食堂が軒を並べていて、田園のただ中に突然のように出現した兵馬俑城下町といった印象で、賑やかだ。

運転手の先導に従って、博物館手前の最近建てられたような真新しい「西安秦陵蠟像館」へ。ここでまたもや外国人にとっては腹立しいひと悶着。おそらくこの蠟像館への入場料だけはツアーの料金に含まれていたのだろう。入場料は一〇元だったけれども、僕はフリーパスで中に入ることができた。館の職員と運転手が人数を確認していた。悪い予感にと振り返ると、案の定、二人の西洋人女性とイギリス人カップルが制止されていた。外国人料金は三〇元(FEC)なので、追加を要求されていたのだろう。彼らは職員や運転手とのひと悶着のあと、腹を立ててそのまま秦陵博物館の方へと歩いていったようだ。

「西安秦陵蠟像館」の中はというと、「西安事変庁」と同じく蠟人形館で、いかにも兵馬俑博物館にあやかっていたような印象なのだけれども、兵馬俑見学の下勉強としては良かったと思う。春秋戦国と呼ばれる混沌と分裂

の状態から統一を成し遂げた過程、始皇帝の悪行として名高い焚書坑儒、文字や度量衡などの統一政策、不老不死への執着などが、各場面の蠟人形の展示によって説明されている。秦の始皇帝についての歴史のおさらいをしたような気分です。館をあとにして、秦陵博物館の方へと向かった。

さて観光ツアーもいくつかの見所をまわり、しばらく行程を共にしているところ、そこにある種の連帯感のようなものが生まれてくるものだ。特に中国人の場合は身内と外との感覚の差が激しいように思う。例えば駅や百貨店の従業員の腹立たしい接客態度は有名だけれども、それも一歩身内的な立場になるとその態度は豹変したりもする。ともあれ、そのときの僕はツアーの中国人たちとはほとんど言葉を交わさなかったけれども、西洋人たちの存在によってかぜん身近な存在としてクローズアップされてきたらしいのだ。つまりツアーの中国人たちにとって、得体のしれない外国人、言葉も通じない外国人としては僕も西洋人たちと同じだったのだけれども、蠟人形館での悶着とその後の西洋人たちの別行動によって、中国人たちにとってその西洋人たちは外の人、関わりのない人たちという位置になってしまった。それに対して、僕の方はというと言葉は分からないにしても、姿形はよく似ている同じ東洋人。おまけにひとりツアーに混じって中国人たちのあとをちよこちよこ付いてくる。というわけで元来が世話好きな中国人のこと、是非ともこいつのことを同じ中国人として(?)守ってやらなければならないという気運が生まれてしまったらしいのだ。

秦俑博物館の入場券売り場に向かって歩いてみると、ツアーの若い男が親切にも、

「俺がおまえの分も買ってやる」

と言って、チケットを買ってくれた。男は、僕がチケット売り場で中国語を話せないで外国人だと見破られてしまうことを心配して代わりに買ってくれたのだ。男の親切に「謝々」と答えながら、チケットを受け取った。人民幣で六元。ちなみに外国人はFECで五〇元だった。(なんととほうもない二重価格なのだろう)。

兵馬俑が偶然井戸掘りの農民たちによって発見されたのは一九七四年。もしや秦始皇帝の陪葬坑では、ということとは当時から考えられていたが、そのスケールが東西二三〇メートル、南北六二メートルにも及ぶものであり、その中に等身大の兵士や馬の俑、すなわち兵馬俑が推定で七千体も埋まっているものとは誰も思いだにできなかった。当時、十日間か長くて半月と考えられていた発掘は、その後現在にいたるまで実に二十年にわたって続けられることになった。

始皇帝が中国を統一したのは紀元前二二一年。その滅亡は彼の死後紀

元前二〇七年のこと。始皇帝に関する文献は数多く残されているが、秦の時代は長い中国の歴史からすればまばたきほどの期間でしかない。始皇帝と秦の時代を具体的に知る手がかりとなる遺跡などは極めて限られていた。兵馬俑の発見は始皇帝と秦の時代を二二〇〇年の時代を越えて現代によみがえらせるものとして、世界中を驚かせた。

体育館風の大ドームの博物館に足を踏み入れて、手すりから覗き見ると、無数の兵士たちと馬の像。ほぼ等身大の土色の像がほぼ四列縦隊になつて見渡すかぎりびっしりと並んでいる。ひと目見たときは何か異様な光景だけれども、それが二二〇〇年前、始皇帝によって造られたものだということを考えると、驚きがじつくりとわき上がってくる。また二二〇〇年の時を越えて現在に出現した極めてリアルな兵士たちの無数の像を見ていると、その沈黙がまた異様な迫力をもつて迫ってくるようだ。この地下軍団、兵馬俑は始皇帝が率いた当時の秦の軍団の編成をそのままに再現したものだと考えられている。現在目にすることができるのはその一部にしかすぎないということだ。参観順路に従つて後方へと歩いていくと、まだ修復が行われていない兵馬俑やビニールシートにおおわれたところが目に付く。

これはいったい何なのか、と僕は思いながら館内を歩いていった。この壮大、そしてこの不思議はいったい何なのか。しかもこの七千体ともいわれる兵馬俑は地上からはまったく見えない闇の空間に、まるで始皇帝の死後の世界を警護するかのように、沈黙のうちに二二〇〇年を過ごしたのだ。これはいったい何なのか。不思議としか形容のしようのない理解不可能なものを見てしまったような気がして、僕はとまどいながら歩いていった。

兵馬俑坑のドームを抜け出ると、目の前に平屋造りの建築がある。実は、兵馬俑坑は一号坑だけではなく、二号坑、三号坑と発見されている。目の前の建物が三号坑。建物を入っていくと、こちらの方は一号坑に比べるとかなり規模の小さなもので、また兵馬の配置も異なる。一号坑が実戦部隊の戦闘体形だとすると、こちらの方は將軍を警護する兵士と戦車の兵馬俑だということだ。三号坑の兵馬俑には秦の滅亡後に項羽が行った焼き打ちや風化をのがれて、わずかにその色彩が残っていたと言われる。かつて兵馬俑は生身の人間と見紛うほどにリアルに彩色されていたのだ。

三号坑の建物をあとにして、秦俑博物館の出口に向かって歩きながら、僕は兵馬俑の考えようによっては偏質的ともいえるリアリズムのことを考えていた。どうして埴輪ではなくて、兵馬俑なのか。しかもそのようなものは中国の長い歴史においても特異なものだということだ。僕にははつきりとは分からなかったけれども、兵士たちの姿、顔かたちはその出身

地が特定できるほど、一体一体が写實的に、精巧に造られている。そのリアルへの偏質はいったい何なのか。もしかしたら、その晩年に不老不死への執着を強めたといわれる始皇帝の執着が、形を変えて死後（地下）の世界へも生（地上）の世界を持ち込むことよって、不死を達成しようとしたのではないだろうか。そして地下の軍団があのようにリアルなものであるとすると、地下の宮殿もまたそのようなものであり、司馬遷の記述もまたあながち荒唐無稽なものとは言えないのかもしれない。

それにしても、と僕は思う。二二〇〇年ものあいだ、地上における戦乱、平和、天変地異にもかかわらず、そしてまた自然の侵食や風化にも耐えながら、あの七千体の地下軍団はいったい何に対して戦闘体型を取りつけてきたのか。暗闇の地下で、人々の記憶からも歴史からも忘れられて、身じろぎもせず、永遠のような沈黙を保ちながら。始皇帝はいったい何を恐れていたのだろうか。あの地下軍団によっていったい何を守ろうとしたのだろうか。僕は、ふと思う。少なくとも始皇帝その人の思惑よりも地下軍団の戦闘体型の方がずっと長く生き延びたのだと。二二〇〇年。思惑が減び、国が減び、記憶が減び、おそらくすべての守るべきもの闘うべき相手が減びても、暗闇の地下で戦闘体型を取り続けた七千体の地下軍団。不思議な感慨を抱きながら、僕は博物館脇の並木道を歩き、博物館のゲートを出た。大通りの両側にはお土産物屋や食堂などが並んで、どこにもある観光地に特有の賑やかさが漂っていた。まるで地下の閉ざされた暗闇の世界から、昼間の世界へと戻ってきたような気分で、僕はその賑やかさの中へと入っていった。

秦俑博物館のあとは、再び二〇分ほどミニバスに揺られて華清池へ。

入場門前の道にはたくさんさんの屋台（軽食や果物やお土産）が並び、またたくさんさんの観光客で賑わっていた。ちょうど昼過ぎの時間だったので、イギリス人のカップルとともに露店の食堂に腰を下ろした。彼らは観光地の入場のいざこざや二重価格に気分を害したのか、言葉少な。女性の方は食べたくないという感じで、男と二人で小包子一皿（五元）をつつきあって昼食代わりにした。食後、少しあたりを散歩するという二人と別れて、とりあえず華清池に入場した。

華清池は古くからの歴史をもつ温泉で、唐代に楊貴妃と玄宗皇帝のラプストリーの舞台にもなったところだということだ。また西安事件の折りに蒋介石が監禁された場所でもある。

しかしながらその華清池に入場した僕が出あったのは、楊貴妃のイメージでも蒋介石の歴史でもなく、ただただあふれるばかりの観光客のざわめきだった。もっとも僕としてもすでにツアーのメインイベントは消

化したあとという気分だったので、そんなに悪い印象もなく、流れに流されるようにしてちよつとした公園のような華清池を漂っていった。いくつかの寺院や蒋介石が監禁されていたという五間家など。

しばらくひとりでぶらぶらと歩いていたのだけれども、ふとしたことで兵馬俑博物館のチケットを買ってくれた男に出会った。彼は、これは放っておけないと思ったのかもしれないが、親切にも先にたつて案内してくれた。しばらく石段の通路を登ったり降りたり、それから山の斜面の石段を登っていった。しばらく登っていくと、チケット売り場があり、ここからは山道になっていて頂上の方へと向かうようだった。彼は、登ろうか、と誘うのだったけれども、疲れていたし、集合時間が気になったので辞退した。代わりに、チケット売り場の脇の売店でジュースをおごってくれた。

少し早い目に観光客たちの賑わいを通り抜けて、華清池をあとにし、駐車場へと戻った。ミニバス付近にはイギリス人のカップルだけ。外国人料金に怒って、ここにも入場しなかったのかどうかは、とても聞けなかった。背後は小学校だったのかもしれない。塀の向こうのプールから水遊びをする子供たちの歓声が聞こえてきた。

華清池での観光を終えて、バスは西安の市街に向けて走っていった。すでにたっぷりと遊んだあとだったので、観光はもう十分という様子で観光客の多くは疲れた顔をし、また眠っている人もいた。

あとはホテル戻るだけ、と思っていると、さにあらず。バスはなにかの公園らしき場所に停車した。まだツアーは終わってなかったのか、と思いつながらバスを降りただけけれども、降りたのはツアー客の半数ほどだった。どういう場所か分からないままにチケット売り場へと向かう。ツアー客のあとから、さてチケットを買おうとすると、初老の中国人の男が、「私が代わりに買ってあげよう」

と言ってくれた。兵馬俑博物館のときにチケットを買ってくれた男はバスを降りなかったようなので、彼の代わりに申し出たのだらうか。ともかく彼に人民幣を渡して、買ってもらうことにした。

問題なくチケットを買うことができるだろうかと少し心配しながら、男のうしろからチケット売り場の窓口をうかがっていると、職員は窓口から男の肩越しに僕の方を覗き見るようにして、

「あいつは中国人か？ どの人間だ？」
と言うように男に言葉を投げつけるのだった。

やはりなにか悪いことをしているという後ろめたさのようなものがあったのかどうか、職員の言葉に初老の男はちよつとひるみつつ、

「シンジャンダ（新疆の人だ）、シンジャンダ」と答えた。

たぶん男の頭の中には、ツアーの出発のとき運転手が僕に向けて放った「ウルムチ」という言葉があったのだろう。ともあれ、服務員は納得しきれないような様子だったけれども、しぶしぶチケットを差し出したので、ありがたく男からそれを受け取った。突然新疆人にされたことがこそばゆくもあり、またその初老の男と密かな秘密を分け持ったような親密な交感を感じた。

ちよつとしたトラブルを乗り越えて入場したツアーのラストイベントは半坡遺跡だった。中はちよつとした公園のようになっていて、体育館のドームのようなメインの遺跡そのものの他に、いくつかの建物が点在し、関係物の展覧を行っている。その日は「秦兵馬俑古動物化石展覧」というものをやっていた。要するに恐竜の化石の展覧会だ。入口でチケットを買ってくれた初老の夫婦連れとともに、ちよつと速足で展覧会をぐるつとひとまわり。

メインの半坡博物館は体育館のような建物で、中に入っていくと、今しも発掘されたばかりというような様子で、村落の遺跡を手すり越しに見ることができる。半坡遺跡は、新石器時代の仰韶文化（四〇〇〇—二五〇〇年）に属する村落遺跡だということで、住居、家畜小屋、穀物貯蔵所などの跡や、発掘された生活用具などが展示されている。

あまり時間がなかったのでぐるつと博物館をひとまわりして、出口の方へと向かった。観光疲れでなかばぐったりとしたような空気の漂うミニバスに小走りで乗り込むと、すぐにミニバスは西安市街地へと向けて走りだした。

勝利飯店前でミニバスを降りたのは数人。中国人観光客のほとんどは他のホテルに泊まっているのだろう。ミニバスを見送ろうとしてふと見ると、秦俑博物館の入場券を買ってくれた男が目についた。観光疲れでぐったりとしたように窓にもたれている。トントンと外から窓をたたいて、「謝々、再見」と手を上げた。

勝利飯店の部屋に戻ると、同室のイギリス人カップルは疲れた顔をしてベッドや椅子にもたれていた。僕の中には、少し後ろめたいような気まぜいような、どんよりとした感情がよどんでいた。彼らに対してなにか悪いことをしたような気分だった。僕だけが二重価格をうまくすり抜けて、結果的に彼らを置き去りにしてしまったような形になってしまったので、そのことが心をとがめたのだろう。そもそも今日のツアーの存在を教え

てくれ、それに誘ってくれたのは彼らだったのに、僕は彼らとともにツアーを楽しむというよりも、彼らに対してあいまいな距離を保ちつつ、あるときは彼らと行動を共にし、あるときは結果的に彼らを置き去りにして、中国人観光客と共にツアーを楽しんだ。

僕は自らの所属というものに関して、ある種のあいまい性を感じた。僕はイギリス人カップルのようには外国人ではなく、また、と言ってももちろん中国人でもなかった。法律的にはもちろん外国人であるし、外国人としての様々な制約も受け、それに対して怒りもするのだけれども、中国人と一緒にツアーでは僕はいまいな、いわば中間地帯のような場所にいるのだった。中国人たちと僕とをあいまいに囲う共同性は、例えば東洋とあるいはアジアと呼びうるものなのかもしれない。それはもちろん歴史的にも文化的にも存在するある種の共同性なのだけれども、あくまでも非合法的に、目配せ的に、あるいは極めてあいまいに存在するものなのだ。合法的に存在する分割線は国籍だけであり、中国人と外国人だけなのだ。

(中国の歴史的な事情によって、香港、台湾人、華僑という区分が存在するけれども。) というわけで、公には僕は外国人であり、中国人とは切り離されて、イギリス人カップルと同じカテゴリーに囲われる。ツアーにおいて、中国人観光客とイギリス人の間であいまいな距離感を泳いでいた僕は、ここ外国人用のホテルの四人部屋では突然またイギリス人カップルと差し向かいになる。極めてあいまいなピンボケ状態の距離感が、突然同じ外国人として、いわば一人と一人として明確になるのだ。僕の感じた気まずさというのは、一人の外国人という明確さによってそのピンボケ状態の存在のあいまいさというものが明るみに出されたということのような気がする。

イギリス人のカップルはというと、別に僕のことを咎めだてているわけではなくて、たぶん「日本人は中国人のように見えて得だな」くらいにしか思っていないようだった。それよりも何よりも外国人料金、二重価格、二重貨幣制度の方にその怒りを向けていた。そして融通の効かない官僚的な制度に対して。イギリス人の男はベッドにもたれながら、疲れた表情で言ったのだ、

「I hate FEC」と。

夜。イギリス人のカップルと一緒に夕食に出た。和平門付近には野外デイスコがしつらえられて、中国人の若者たちが楽しんでいた。その脇を通り抜けて、和平門のすぐ北にある食堂へ。そこは食堂というよりも、もう少しこぎれいな小レストランという印象で、メニューには外国人のために英語のものも用意してあった。

もともと英会話には弱いので片言の会話だったけれども、食事をしながらいろいろと話をした。男の方は美容師でミュージシャンだと言う。そう言いながら、ギターを弾くそぶりをしてみせるのだった。彼らはこのあと昆明に向けて、明日の夜出発するということだった。それからタイの方へ行くらしい。

「日本へ行ったことは？」

「ない。でもいつか行きたいと思っている」

僕はノートに日本の住所を書いて破り、それを彼に手渡した

「日本へ来ることがあったら、連絡をくれ。案内するから」

それは自らの彼らに対するあいまいな距離のとり方への罪滅ぼしの意味もあったのかもしれない、と思う。

「Thank you」

と眩きながら、彼はその紙片を受け取った。

僕は、中国に成り代わる義理はないけれども、今後の旅において彼らの中国に対する印象が大逆転するような良いことがありますように、と心の中で祈ったのだ。